



「林住期」にこそ、ジャンプできるように！

五木寛之の著書に「林住期」があります。紀元前2世紀インドの広まった思想「四住期」では、人生と仮に百年とすると、「学生期（生まれてから25歳まで）」「家住期（25歳～50歳）」「林住期（50歳～75歳）」「遊行期（75歳～100歳）」というそうです。「学生期」は、心身を鍛え学習し体験を積む。「家住期」は、就職し結婚し家庭を作り子どもを育てる。

そして、「林住期」は、実は人生の黄金期。体力的な衰えや身の置き所に不安を感じながら、その中で真の生きがいを見つけ、生活のために生きるのではなく、真にやりたいことのために生きる。「学生期」「家住期」は、その「林住期」を生きるための助走期。「林住期」こそジャンプするとき。そんな風に考えてはどうだろうかと思五木氏は述べています。

私は彼の考えに共感し、また勇気づけられました。現に60歳で始めた習い事でイキイキと教室をしたり、自分の作品を生み出しているいらっしゃる方々もたくさんいらっしゃるのではないですか。高齢者のデイサービスで出会うお年寄りの方々から、どんなに弱った姿にも、それまでの人生が根っこにあるのをひしひしと感じます。

「林住期」をこのように意識することで、「学生期」「家住期」の見方、過ごし方が、変わってくると思いませんか？

私は離婚してからの16年を伴侶なくきたため、一人の孤独感も人に支えてもらうあり難さ、大きな力の中で生かされていることも味わってきました。その時間の中で、「パートナーと共に生きる」を心から望むようになりました。

子育て、教室をした時間があつたから、このパートナーに出会い、この度の決断をすることができたのだと思います。私の力強い土台「家住期」に感謝です。

S君は、すぎなの開室年（2001年）小5で入会以来、高1の1年間休会、高2で再開、大学時に退会しました。垂水たんけん隊を手伝ってくれたり、今も弟がすぎなを続けていたり、何かしらつながっていました。

S君は、この春名古屋大学大学院（法学部）に入学します。ここまでいろいろな道のりがありましたが、彼の学習だけでなく、人生の基礎にもすぎなの学習があるのだそうです。嬉しくてインタビューをさせてもらったところ、S君が自らまとめてくれました(^_^)v

● すぎなとの出会い

～ 5年生で指を使って計算していた ～

私は小学生の頃、正直言って勉強ができませんでした。たし算でさえ、5年生になっても指を使わなきゃできなかったんです。そんな私に見かねたのか、ある日母に連れられて岩田池のすぎなの教室に行きました。最初、1年生レベルのたし算のプリントをやりました。「これぐらいできるだろ」と思っていたのですが、結構時間もかかり、ミスも連発でした。でも、1日1枚と枚数を決めてコツコツやっていくとだんだん出来るようになり、いつのまにか指を使わなくてもよくなり、あるとき算数のテストでも満点を取れるようになりました。だんだん学習することが楽しくなってきました。

● 「塾に行けば、点数が上がる？」

学校の言う通りにすれば、難関大学に行ける？」

中学でも大丈夫かと思ってたんですが、初めての間試験はポロポロ。焦りが出てきて、すぐ他の塾にも通わせて貰うことになりました。それで成績は平均以上にはなったんですが、らくだのプリントは疎かになり、塾で出された問題の答え合わせもわからない問題の解き方も塾に行ってからで、自分ではやってなかったんですよ。

ある日、晴子さんに言われたんです。「塾に行かなきゃ学習でき

ない塾依存症になるよ」って。心に留めたものの、実は何のことかわかっていなかったんです。だから、その後も「塾に行けば点数が上がる」という思いから抜け出せないままでした。

小学校のとき、正義感が強いのか我が強いのか、おせっかい焼きだった私は、「人を助けることが素晴らしい」と考えて、「将来弁護士になる」と決意していました。そのためには、難関大学に入る必要があると考えたんだけど、そのときの自分の学力では、中堅クラスの高校しか行けず、難関大学なんてとんでもなかった。だから、「難関大学合格を保証する」と唱って様々なサポートをしてくれる県外の高校を捜して受験し入学しました。その学校で言う通りにしていたら、有名大学に入れるだろう、って思っていたんですね。

● 殺人事件と溝

そんな考えで入学した4月半ば、夜回り先生として有名な水谷修先生の講演会がありました。薬物や援助交際などで身も心もずたずたになった子どもたちのために闘う先生の話聞き、命を大切に生きていかなければならないと思いました。しかし、その数日後びっくりする事件が起きました。同じ高校の生徒が殺人事件を犯したんです。事件の原因は「先生に怒られてむしゃくしゃした」と聞きました。彼は講演会を聞いて、「自分も大人の被害者だと思った」と言っていたそうです。

私には大きな衝撃でした。全校集会で事件について校長から説明があり、追悼が行われましたが、それでおしまいでした。私はひたすら「どうして彼が殺人を起こしてしまったのだろう？何が起こったのだろう？命の尊さとはなんだろう？」などと考え悩んでいまし

た。一方、クラスの仲間たちは加害者の悪口を言ったり、事件をふざけ話のように話していたりと、他人事のようにでした。担任の先生に悩んでいると言っても、「もう忘れなさい」と言うだけでした。

僕と、学校・仲間達との間に溝ができたような感じがしました。

相性も悪かったんでしょうね。やがて仲間たちや学校側とうまが合わなくなりました。1人浮いていたのでよく先生に怒られていました。授業もちゃんと受けて、課題もこなしているのに、成績もなかなか伸びませんでした。本当にここにいて大丈夫なのかと不安も深まりました。ついにその年の10月、体調を崩して家で少し休養することになりました。そういう時っていろいろ考え込むものですね。自分の将来は大丈夫か、なぜ彼らとうまくやっていけないのか、と考えていると学校を辞めたくなり、ふさぎ込んでいました。

● 自分で自分の方法を見つけていきたい

年が明けて1月、担任の先生が辞めることになりました。

「この学校は先生がよく変わる。あの先生まで辞めたらたまらん」。

このクラスメートの言葉に私は気づいたのです。私も彼らも人任せだったんだ。自分でやる気を出さないとダメなんだと。

やがて出た3年生の大学合格実績の結果は、私の2年後を占うようでした。「ここにいても難関大学には行けないよ」と。

このような学校依存の中で伸びる子もいるかもしれないけれど、私は自分で自分の方法を見つけていくタイプなんだ、と思いました。そう思えたのも、「自分で決めて、自分で考える」ということをすぎなでしていたからかもしれません。

それに気づいた私は高校を辞める決意をしたんです。

● 息苦しくなかった受験勉強

～ 基本の反復、課題・時間を自分で決めてやる ～

高校を辞めて、私は大手予備校の高卒認定コース（以下、高認コース）に行くことにしました。すぎなもまた始めました。高卒認定試験（旧・大検）も8月に受けて合格しました。

高認コースと高校は、全く対照的でした。高認コースは自主的な場。チューターに相談しながら、自分で授業を組んで授業を受けます。強制もされなくて、自分で決めて自分で学習するところでした。大学での学び、そして、すぎなの学びにも似ていましたね。

入って1年目、8月の高卒認定合格後はぶらぶらしていましたが、2年目は受験を控えていたので、5月ごろから本腰を入れて学習を始めました。そこで、私はどうすればいいのかわからなかったのも、すぎなでの学びをモデルに受験学習を計画していきました。なるべく基本的なことを反復すること、予定表を作って課題や時間を自分で決めてやることを心掛けて学習していきました。

学習漬けの毎日でしたが、高校のときのような息苦しさはありませんでした。息抜きもちゃんとしていました。

やがて、年が明けて受験本番となりました。1月のセンター試験、2月の私学入試は全滅でした。すっかり私はあきらめていました。

しかし、晴子さんが、3点足らなくて不合格だった関西大学の後期試験を受けるよう押してくれたんです。「たったの3点や。受験まで1週間でも、これまで通りやれば、まだまだ上がる」と言って、津観音のお守りを持ってきてくれました。お守りをかばんに入れて受験に行きました。やるだけやりました。数日後、合格していました。つくづく、晴子さんに助けられたなって感謝感謝です！

● 多様性を受け入れる器ができてきた

～ 書いて、考えて、議論して ～

大学生になって、私は親元を離れ一人暮らしを始め、いろいろな経験をすることができました。1年生のころから、毎年学内外の懸賞論文に応募してきて、毎年入賞させていただきました。入賞も嬉しいですが、自分で考えて書くトレーニングになったのが何よりもよかったと思います。

アルバイトもしました。中でも印象的だったのは、通っていた予備校のアルバイトで、大学生たちでする就職活動イベントや教育用アプリケーションなどの企画・運営でした。他の大学の学生たちとの議論などは、私にとって刺激的でした。

関西大学はマンモス大学なので、いろいろな人が集まってきます。私の大学時代の友達を挙げてみると、出身県もタイプもばらばらで、社会人学生のおばちゃん（おねえちゃん？）やフランス人や中国人の留学生、中には不良みたいな奴もいました。中学・高校の自分なら、とてもつき合っただけではなかったでしょうね。

多様性を受け入れる器ができてきたのが一番大きかったですね。

● またやってしまった…今度こそ！

私は当初弁護士になろうと大学院を目指していました。ところが、「警察官から昇任試験を受けて昇進していけば、検察官になることもでき、しいては弁護士になることもできる」という話を聞いたのです。それなら、実務を学びながら夢を実現できると考え、まず警察官になる道に方向転換したのです。そして、警察官の試験に合格し、合格後は自動車やバイクの免許を取り、剣道も習い始め、卒業

間際に初段を取りました。

ところが、警察学校入校後、2週間ほどで体調を崩し緊急入院しました。「これではやっていけない」と感じ辞める決意をしました。

後日、いろんな人に自分の進路を相談したところ、ほとんどの人に「あんた警察は向いていない」「そのまま弁護士目指していればよかった」と言われました。今思うと、考えが安直すぎた、視野が狭かったと思います。

振り返ると、私は高校進学のとおり同じミスをしでかしたのだと思います。「高校」を「警察」、「難関大学」を「検察官・弁護士」に置き換えたにすぎません。そこに行けば、どうにかなるだろうと、やはり人任せでした。

あらためて大学院に進学すると決め、この春から名古屋大学大学院に入学することになりました。今度は、人任せにしない、どうにかなるだろうというようないい加減な考えを捨て、自らの信念の下、人の役に立てる立派な弁護士になるぞと決意して、学習に精を出します。」

（豊吉より：あまり完璧は目指さないようにね(^_^)）

● 考え続けることが大事なのは？

～ 殺人事件は「他人事」ではない ～

大学に入学して、高校での殺人事件の判決文を探して読みました。「被告人（加害者）は人づき合いが苦手だった・・・ストレスをため込んだことが事件の原因」と書いてあったことなどから、当時の自分とも重ね合わせ、あの事件は他人事ではなかった、人間とは怖いもんだ、と改めて思いました。

私は今でもあの殺人事件のことを思い出しますし、ニュースで殺

人事件が取り上げられるたびに、被害者や加害者のこと、「生命の尊さ」を考えます。家族や友人とも話し合うようにしています。

以前は、早急に答えを出したかったものですが、今はそうではなくなりました。悲しい話や事件については、面と向き合うのはつらいことかもしれません。でも、どれだけ時間がかかってもいいから、「なぜ事件は起きたのか？生命の尊さとは何か？自分はどう生きるのか？」と皆で日々地道に考え続けることこそが、よく生きることにつながっていく。それが殺された被害者への供養、加害者の苦しみを生かすことになるのではないかと考えるようになりました。まさに生命の尊さの反復学習とでも言いましょうか。

● 人生も反復学習

なぜ、このような考え方をするようになったのか。気が弱い、気にし過ぎの性質と言えばそれまでですが、やはり、すぎなでの学びが影響しているのではないのでしょうか。

プリントでは、どれだけ時間がかかってもいい、どれだけミスしてもいい、答えを見てもいい、同じプリントを何枚やってもいい、前のプリントにもどってもいい。他者の意見もちゃんと聞くが、鵜呑みにせず自分で考えて決める。

そうした反復学習が私の人生観にも影響を与えているようです。

**** **** *** *** **** ** ******

晴子さんありがとうございました。そしてお疲れさまでした。

すぎなはこれで一幕でしょうが、これも皆さんにとって新たな門出になることでしょう。皆さん、しっかり生きていきましょう！